

命の水の担い手として — ライフラインを守る管工事業界 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

元日に発生した能登半島地震で尊い命が失われ、被災した人々はいまなお困難な生活を強いられています。とりわけ断水による被害は能登地方の七尾市、輪島市、珠洲市、能登町、穴水町、志賀町を中心に長期化する見通しです。

有史以前から人間は水と共に生きてきました。日常生活に欠かせない飲料水・生活水はもとより水がなければ産業も文明も社会も存続することはできません。文字どおり水は人間の命の源です。

水を送り届けるライフラインを縁の下で支えているのが製造・流通・施工・維持管理・清掃などの業界関係者です。能登半島地震に際しても地元業者の命がけの奮闘に加え、各地から応急復旧の応援隊が駆けつけています。余震や風雪のなかで水を守るために必死で汗をかく。そんな無名のヒーローたちが集う管工事業界に今回あらためて光をあてたいと思います。

人の役に立てる仕事を

管工事業界の全国組織である全国管工事業協同組合連合会（全管連）は昨年11月に若者の入職を呼びかける漫画「命の水物語」を発刊しました。藤川幸造全管連会長は「次世代を担う中高生に管工事の魅力伝える手段として作成した」と制作の意図を語っています。

少子高齢化社会の進行に伴い管工事業に限らず人手不足は一段と深刻化しています。とくに今年はいわゆる2024年問題として時間外労働の上

限規制が4月から適用されることになりました。若者の入職・育成・定着は業界の未来を左右する最重要課題とっていいでしょう。

全管連が若者に読んでもらおうと企画・監修した漫画「命の水物語」は

①万里茂カッコいい！②命を守る、大切な水③富士河設備工業④キャリアアップ⑤力を合わせて！次の世代に！——の全五章で構成されています。音楽の大好きな水翔、水翔の幼馴染の藍水が富士河設備工業に就職し、経験を積み、成長していく姿を描いています。ふたりは富士河設備工業の社長、先輩の万里茂、九把、桃らに支えられて管工事業界で働くことに喜びや誇りや生きがいを感じていきます。

前半のクライマックスは中学生の水翔と藍水が大震災に遭遇する第二章です。激震直後、富士河設備工業の社長は社員たちに「俺たちの使命は何だ？」と問いかけます。万里茂が「生きるために不可欠な水のある生活を提供すること！」と答えると「そうだ！つまり命を守る仕事だ！明日から忙しくなるぞ。覚悟しとけ！」と檄を飛ばします。

明るく給水活動や復旧工事に奔走する万里茂の



姿を見て水翔は感動します。万里茂は街の人たちから「がんばれ」「ありがとう」と声をかけられ、「本当この仕事やってよかった」と実感します。その想いは「僕も人の役に立てる仕事がしたい」という水翔、そして藍水にも伝わっていきました。

ビルドゥングス・ロマン

高校卒業後、富士河設備工業に入社した水翔と藍水は社長や先輩たちに励まされ、徐々に仕事を覚えていきます。少し慣れてきた頃、水翔は配管スタンドを路上に置き忘れてしまいました。九把から「さっき歩いてきたお年寄りがつかずいてたぞ」ときびしく叱られ、安全確認を怠った自分を反省します。強面ながら根はやさしい九把も事故につながる失態を見逃すことはできません。

さまざまな教訓を糧にしながら腕を磨いていった水翔は藍水に誘われて技能五輪全国大会に出場します。万里茂の妻の桃の指導で水まわり設備のリフォーム提案ができるようになった藍水は水翔の良きライバルになっていました。入社5年目を迎えたふたりは国家資格の給水装置工事主任技術者試験を受け、晴れて合格します。万里茂もまた一級管工事施工管理技士の技術検定試験に挑戦し、難関を突破します。本書ではこれらの資格や技能五輪について簡潔に解説し、資格取得・技能評価が給与や人事に適切に反映されることを明らかにしています。同時に就業時間や福利厚生など労働環境が適正に整備されていることも各エピソードでわかるようになっていきます。

管工事業界の青春群像を描いた本書をドイツで誕生したビルドゥングス・ロマン＝自己形成小説の一種と見做すこともできます。先駆けとなったのは文豪ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』です。1796年に発表された同書は演劇に情熱を燃やす若者が主人公です。ときには悩み、迷い、苦しみながらマイスター＝名匠をめざして人間的に成長していく主人公の姿は同時代の若者たちに熱烈に支持されました。

ゲーテの影響でビルドゥングス・ロマンの伝統はノヴァーリスの『青い花』、ヘッセの『데미アン』、トーマス・マンの『トニオ・クレーゲル』、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』などに受け継が

れます。日本でも夏目漱石の『三四郎』、森鷗外の『青年』、井上靖の『あすなろ物語』、山本有三の『路傍の石』などが系列の作品と位置づけられています。いつの時代も若者たちの自己形成は普遍的なテーマになってきたといっていいいでしょう。

未来を生きる若者たちへ

厚生労働省が所管している水道行政は4月から運用業務が国土交通省、水質関係が環境省に移管されることになりました。歴史的な変化に際して全管連は予算・人員の十分な確保・業界振興策の充実を関係省庁や国会議員に要望しています。

要望の席上、藤川会長は全国各地の傘下組合が大規模地震などの災害発生時に率先して現場に急行し、応急復旧活動に携わっていることや全管連所属企業の多くが日頃から夜間・休日の漏水修理当番などに従事していることを説明しています。しかし会員数の減少によって今後の応急復旧体制の維持が危惧されることから、若者の入職促進へ魅力ある業界づくりに努めることが必要不可欠として賃金・休日などの処遇改善や適正利潤・適正工期の確保などを訴えています。

今回の能登半島地震に際しても水道事業者などの要請を受けて全管連の傘下組合は続々と被災地の応援に出動しています。ライフラインは英語で命綱を意味しています。まさしく命の水の担い手としてライフラインを果敢に守ろうとする人々が正当に評価されなければなりません。

精神科医としてハンセン病患者の治療に一生を捧げた神谷美恵子は『生きがいについて』などの哲学的随想で「人間がいきいきと生きていくために生きがいほど必要なものはない」と書き記しています。生きがいとは何でしょうか。「ひとに真のよろこびをもたらすものこそ、そのひとの生きがいとなりうる」と明言しています。そして彼女は「過去という重い荷に制約されることなく、すべてを未来にかけて、わき目もふらずに何ものかを創り出そう」と若者たちに呼びかけています。

命の水を守る仕事は未来に生きる若者にとってとても生きがいのある仕事だとわたしは思います。明日への希望を抱く多くの若者が「命の水物語」のように結集することを願ってやみません。